神様と師匠

龍の花嫁　３

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18359934

モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻

相談所vs神様３話目です。会話メインです。モブの気持ち編です

龍の花嫁　3

「タイムリミットは今日を入れて７日。婚礼の儀が終わるまでに、霊幻が神様に嫌われるか、儀式の不成立条件を満たさなきゃいけねぇ」
家に帰って一息ついていた茂夫に、エクボはこれまでにない真剣さで語りかける。
「相手は神様だ。本来花嫁に選ばれるのはめでたいことだ。だから、これまで悪霊や呪いを祓ってきたみたいに、神様の祝福を祓うことはできん」
「でも儀式が終われば、それで終わりじゃないの？」
「型式だけ残ってるタイプのならそうだ。でも、霊幻が引っ掛けてきたのはホンモノの儀式だ。おそらく婚姻が成立すれば、霊幻は神域に嫁ぐことになる」
「……嫁ぐとどうなるの？」
「おそらく……魂を神様に持っていかれる。身体は死にはしないが、２度と目覚めなくなるだろうし、もはやそこに霊幻はいないと考えていい」
「そんな……！」
やっと重大さが分かった茂夫はがたりと立ち上がる。
「今なら点滴だので身体だけでも生かせるだろうが、昔なら衰弱死してただろう。実質、まぁ、死ぬってことだ」
「なんとかしなきゃ……！」
「だがな、幸いというか」
「幸い？」
「霊幻は、モブ、お前との結婚を断ったんだ、神域で。かなり強固な意志でもって」
「え」
嬉しいはずなのに、嬉しくない。茂夫は冷水を浴びせられた気分になった。
「このタイプの神様は生け贄の……霊幻の最も愛している人間の姿を依代にして顕現する。その姿で巧みにあちら側に連れて行こうと

甘い言葉をささやくはずなんだ。実際霊幻はモブを見たと言ってただろ？」
「うん……」
「この手の儀式には邪魔が入りやすいのがセオリーだ。何度もやってきた神様ならそれをよく知ってる。だから連れて行けるタイミングがあれば、手順をすっとばして連れて行こうとしたはずなんだが……霊幻のヤロウはそれを神気を跳ね返すレベルで拒否した。だから助かったんだ。悪運の強いヤロウだぜ」
「師匠が僕との結婚を……強い意志で、拒否した……」
「……悪い、ちょっと配慮が足りなかったな」
ショックを受ける茂夫にエクボは一旦言葉を区切る。
「でもようシゲオ……お前ら付き合いはじめたばかりだろ？結婚まで考えて無いのが当然「考えてるよ」だよなー！シゲオはそういうやつだよな！！」
被せ気味に茂夫が話す。
「すごく悩んだんだ。これから師匠と付き合うってことは、師匠が誰かと家庭を作るタイミングを、僕が奪うことになる。例えば僕が20になった時に別れるってことになったら？師匠は34才だ。同じ年の女性が子供をもう産んでる年齢だ、って知った。そこで僕が、手を離したら……師匠は14才も下の男に弄ばれた、もしくは弄んでいた、そんなふうに周りから見られることになる。年上の男に騙されたと同情される僕とは違って、『次』がすごく大変になるんだ」
「シゲオ……そこまで考えてたのか……」
「だから、あの人に手を伸ばすなら、死ぬまで添い遂げる覚悟じゃないといけない。でないと師匠の人生をめちゃくちゃにしてしまう。これは僕が子供だからで逃げられる責任じゃない。すごく考えたよ。一度はやめようと思った。でも、ダメだったんだ。ツボミちゃんの時とは違う。僕はどうしたって、師匠を諦めることができなかった」
「シゲオ……」
「師匠がいるだけで人生が楽しい。師匠が他の人のものになるって考えるだけで殺意が沸いてしまいそうになる。師匠を手に入れるためなら、きっと、悪いことだって、バレないならしてしまう。……

こんな汚い感情を、愛と呼ばないなら何て名付ければいいのか分からないよ。こんな気持ち、師匠以外に抱いたことは無い」
「……」
「両親にも相手を伏せて相談したよ。勘当覚悟でね。男の人が好きかも知れない、って。最初は気の迷いじゃないか、って言われたけど……話してるうちに、分かってくれた。20になったら、養子縁組をして、師匠を影山の姓にすることも許してくれた」
「いつの間にそこまで！？」
「一年ぐらい悩んで告白したんだよ。師匠の気持ちも伺いながらね。あの人分かりやすすぎたけど」
「シゲオ大好きオーラ全開だもんな……」
「そもそも師匠は僕を子供扱いしすぎなんだよね。昔なら14才で成人だ。そういう相手と付き合うなら、真剣に考えてくれないと……遊びだったなんて許せない……逃がさないよ、師匠」
「……遊びだったなら、まだ良かったかもしれねぇぞ？」
ピタ、と茂夫の動きが止まる。
「神様の目はごまかせねぇ。茂夫が神域で出てきたってことは、間違いなく霊幻はお前を何よりも愛してるってことだ」
「まいったな……」
茂夫のアゴが割れる。それをどこか気の毒そうにエクボが見ている。
「それでも結婚を拒んだ。それがどういうことかってーと……お前さんを愛しているからこそ、絶対に結婚しない、ってことだ」
「え……」
「……思い当たるふしはねーのか？」
「……やけにあっさり、キスしてくれるな、と思ったんだ」
「そのあたりにヒントがありそうだな。まぁなんにせよ、アイツの行動は注意して見ていた方がいい。……人生経験のながい俺様からのアドバイスだ。『愛してるからこそ身を引く』ってのは、そんなに珍しいことじゃねぇぜ」
ゆらりと。
茂夫の髪が、怒りで少しざわめいた。

※※※※※

「本日は結納の儀でございます」
黒い着物の老婆が霊幻に言い放つ。
霊幻は日本家屋についたら有無を言わさず風呂に入れられ、白い振り袖を着せられていた。
「まだ花嫁修行は行いませんが、明日から我が一族の女たちが修行に立ち合いますので、ご了承くださいませ」
「はぁ」
そうこうしているうちに、霊幻は手に台を持たされ、スルメだの昆布だのを乗せられていく。
「龍神様の代わりに我が一族が結納品を準備いたしました。どうぞお納め下さい」
「！……拒否する」
「……かしこまりました」
（エクボが言葉には気を付けろと言っていた。結納……結び納められたらたまらん）
あっさりと老婆は結納品を下げる。
「では、本日もこちらへ……」
古いやしろには、布団がひいてあった。倒れると危ないからだろう。霊幻が布団に入ると、すぐに意識が無くなった。

※※※※※

「やぁ、霊幻ししょう。僕の花嫁。今夜も会えて嬉しいよ。もっとも、来てくれないなら、契りをやぶったとして、僕が迎えに行けたんだけどね」
「よう、龍神様。ご苦労なこったな」
ギラリ。大人のモブの姿をした龍神の目が光る。
「ししょう。今日は結納の日でしょう。どうして僕からの結納品を受け取ってくれなかったの？」
「……モブ」
「そう、モブだよ」

「モブ、言っただろう。俺はお前と結婚はできない」
ほんとうなら、どれだけ一緒になりたいか。辛さを堪えて言うと、ぶるりとたまらなそうにモブが身震いした。
『ししょう！』
「……あなたの気持ちは、とても心地よい。ご馳走様です。また、明日、楽しみにしていますよ。これは貴方へのプレゼントです」
モブは俺の左手薬指に石でできた指輪をはめる。
「……ああ、ありがとな、モブ……」
『ししょう！！』

バチリ、と目が覚める。

※※※※※

「……こんな短時間でマーキングされやがって」
目覚めた霊幻の左手に現れた石の指輪を苦々しく見ながらエクボが言う。
それに気が付いた茂夫が、嫉妬に任せてそれを外そうとしたが、指に魂まで張り付いていてびくともしなかった。
茂夫の喉が獣のような音を立てる。
「いててて、いてーよ、モブ！」
「アンタ、他の男から、しかも僕より先に、指輪なんて受け取ってきたんですか？」
「こえーよモブ！？超能力納めて！！……何言ってんだよ、これくれたのモブだろ？」
「……！？」
モブからの贈り物だと思ったから、霊幻は受け取ってしまった。
龍神の作戦勝ちである。これで略式ではあるが、結納の儀も成功してしまった。
「……それは神様からの贈り物ですよ」
「げっ、うっかり受け取っちまった」
「まー超強力な魔除けだから、とりあえず受け取っとけよ、霊幻。あ、でも返せそうなら返せよ」

「ふんぬぬぬ！……取れないな、コレ……おっと、エクボ、少し席を外してくれるか？」
嫉妬のパーセンテージが上がっていく弟子を見て、霊幻がエクボに退席を乞う。
すっとエクボはやしろの外に出た。
「モブ……大丈夫か？」
「大丈夫じゃないです。やきもちで頭がどうにかなりそうだ」
「モブ」
こつん、と霊幻が茂夫のひたいに自分のひたいを合わせる。
近くなった吐息に茂夫の心臓がどきりと跳ねた。
「胸、触るか……？」
白い着物の合わせから覗く肌は、風呂のせいでうっすらピンクに染まっている。
ゴクリと喉を鳴らした茂夫の返事を聞かず、霊幻は茂夫の右手を取ってそっと着物の中に忍ばせた。
しっとりとした柔肌に、茂夫の意識は全部持って行かれた。
「ししょう……っ！」
茂夫は霊幻の着物をはだけさせ、両手で白い肌を堪能する。
「あっ……ぅん、っは……」
甘やかな声が愛らしくて、茂夫は唇を閉じ合わせた。
角度を変えて甘い口内を貪る。
そのまま霊幻を押し倒して、キスをしながら手を繋いだ時。
爪にかちりと指輪が当たって、思わずカッとなった茂夫は霊幻の舌を噛んでしまった。
「いひゃっ！」
「あっ！すみません、師匠、」
「ん……ヒトんちだし、このくらいでやめておこうぜ」
着物の上半身をはだけて煽情的な姿にしてしまった霊幻を見て、慌てて茂夫は着物の合わせをばっと閉じさせる。
霊幻はふっと愛おしそうに息をついて、よしよし、と茂夫の頭を撫でた。

そのころエクボは。

「石……石の指輪、か。いしの指輪……意志の、指輪……」
上空で考え事をしていた。

続